LOVEの語義について

沼　野　治　郎

まえがき

カール・メニンガーは「愛と憎しみ」の序文で,loveという語は感傷的,情緒的にして軟弱なため,一般に本の題には敬遠される傾向があると述べている[1)]。しかし,思想文化的にユダヤキリスト教の背景を持つ英語にあって,loveの概念は重要な位置を占めている。

そこで,今日とみに男女のセックスと結びつけて受け取られがちなloveの語義を再吟味し,より正確な視点を得るためにこの研究に着手した。その吟味に際して,本稿では,新約聖書が原語のギリシャ語において愛を表わすのに3つの言葉を使い分けていることに着目し,そのことが英語のloveにどのような影響を与えているかに焦点を当てる。

「愛」のような概念について論じる場合,当然哲学,神学,文学,心理学あるいは精神分析学等の多岐の領域にわたるが,英語のloveの語義に関わると筆者が判断する範囲で,全般的に,主として英語で書かれた文献を取り上げ,特定の分野に深く専門的に入らないことを断わっておく。

語源

loveの語源は古期英語でlufu,次に西ゲルマン語で *leuƀ- [2)],更に印欧祖

注1) Karl Menninger, *Love against Hate*. New York. Harcourt, Brace & World,Inc. 1942 p.vi.

2) 星印は記録の残されていない再建された仮想形を指す。

語（Proto-Indo-European）では＊leubh-, to care for,desire,loveに逆のぼる。ゲルマン語族以外に残っている印欧祖語の語根は，ラテン語lubet（libet），it is pleasing,lubīdo（libīdo）,desire,サンスクリット語lubh-yati,he desiresに見られる。loveと同語根の語にドイツ語のliebenがある。また,古期英語のlufuに近く,同じ語根から派生した語に,lief（dear,beloved),belief,believe,leave(permission,approval,pleasure）,libidinous（lustful),libido（motive force,sexual desire）がある。

語源からわかるように,loveには「世話する,望む,愛する」といった基本的な意味が初めからあるが,基本語彙に数えられない,複雑で高度な概念を包含する単語である。従って社会の構造や歴史,文化の変化に伴ってその意味は変遷し,時に新しい意味を付与されることがある。

loveは中世前期以前に男女間の愛を表わすものではなかった

男女間の愛は,シェークスピアが古今の逸話を戯曲に取り上げているように,時代を問わず人の生活に共通してみられる情感であるが,意外なことに「その感情またはそれを言い表わすloveという語の用法は,中世前期アングロサクソンの世界にそのままの形で見出すのは困難[3]」である。古期英語でlove（名詞lufu,動詞lufian）は,詩文散文のいずれにおいても,男女間の愛を表わしている例は少ない[4]。

これは当時のゲルマン社会が,君主と家臣の絆を最高の人間関係とみる封建的な社会構造,生活感情を背景としていたからで,「愛しみ」の関係にある者は男女でなく,男性の主従であったことに注意しなければならない[5]。

中世の伝統を深く堀り下げて研究したC.S.ルイスは,「愛の諷喩」の中

3）寺澤芳雄「Loveは風化しているか？―「愛」のテクスチャーの歴史と組成」,「翻訳の世界」第4巻10号1979年10月，45ページ。
4）同上論文45ページ。
5）同上論文45ページ。Lewis, C.S., *The Allegory of Love, A study in Medieval Tradition*, Oxford : Oxford University Press,p. 9 .

で,この時期の状態を詳しく述べている。今日のように,理想的な幸福は,ロマンチックな愛が首尾よく実った時に到達できる,といった考えは,当時全く考えられず,それを今日のように転換させたのは,11世紀末南仏のプロヴァンス地方におこったトルバドゥールと呼ばれる吟遊詩人による「宮庭風愛」である[6]。このフランスの詩人たちは,恋のロマンチックな感情を初めて表現し,それが南と北に伝播し,その後8百年間今日までヨーロッパの文学に一大転換をもたらしたのである[7]。C.S.ルイスは,この詩人たちの及ぼした影響を,最も革新的にして重大なものと呼び,現代と古典時代を完全に切り離してしまった,と書いている[8]。

辞書の記載に見られる変化

上の11世紀末の宮庭風愛の後,loveが今日のように男女間の愛を表現するようになったのであるが,次にずっと時代をくだって,辞書が現われるようになってから今日までの変化を見てみることにする。

英語の辞書の出現は比較的最近のことであって，18世紀中葉のサムエル・ジョンソンの辞書が最初の辞書と言われている。しかし今日見られるような辞書が現られるのは,ようやく今世紀に入ってからである。

辞書の記載に見られるloveの語義の変化を表にしてみると表1のようになる。

aグループは語義が生じ,使用されるようになった順序に,歴史的に意味を掲げる大辞典である。bグループは,OEDに基づいているが方針は異なり,使用の頻度によって掲げる中小型辞書,cグループは同じく最新の使用状況を頻度に基づいて掲載する最近の辞書群である。

歴史的な順序によるaグループでは,Century Dictionaryが B の「神の愛」を省いているのを除いて,いずれの辞書も,わずかな番号の違いはあって

6）Ibid., pp. 2, 4.
7）Ibid., pp. 2, 4.
8）Ibid.,p. 4.

表1　辞書の記載に見られるloveの語義の変化

表中のABCDは，love（名詞）の語義の中，A.（一般的）好意，愛情，B.（神［へ］の）愛，慈悲，C.異性間の愛，D.性欲，情欲を表わす。

数字は何番目の定義にあげられているかを示す。

aグループHistorical principlesによる辞書

Cent.	1889	^{1}A ^{2}C ^{6}D
Univ.	1932	^{1}A ^{2,3}B ^{4}C D
OED	1933	^{1}A ^{2}B ^{4}C ^{6}D
SOD 3rd	1944	^{1}A ^{2}B ^{4}C ^{6}D
WB2nd	1954	^{1}A ^{2}B ^{4}C ^{6}D
WB3rd	1961	^{1}A ^{3}B ^{4a}C ^{4d}D

bグループ　COD. POD

COD 初版	1911	^{1}A (B) ^{2}C D
COD 4版	1951	^{1}A (B) ^{2}C D
COD 5版	1964	^{1}A (B) ^{2}C D
COD 6版	1976	^{1}A (B) ^{2}C D
COD 7版	1982	^{1}A B (C)
POD 初版	1924	^{1}A (C) ^{2}D
POD 4版	1942	^{1}A ^{2}D
POD 5版	1969	^{1}A ^{2}D
POD 6版	1978	^{1}A B (C) ^{2}D

cグループ　Frequencyによる辞書

Hornby ALD 2版	1963	^{1}A ^{2}C D
RHD	1966	^{1}C ^{2}A $^{3.6}$D $^{8.11}$B
Penguin 2版	1969	^{1}A ^{2}(C) D $^{3.4.5}$B
WB2nd Coll	1970	^{1}A ^{5}C ^{6}D ^{9}B
WB pock 改訂版	1971	^{1}A ^{2}C D
AHD Coll 2版	1976	^{1}A ^{3}C ^{4}D ^{8}B
LNGMN MED	1976	^{1}A (C) D $^{3.4}$B
LNGMN DCE	1978	^{1}A C
World B.D.	1979	^{1}A ^{2}C (D) ^{8}B
Chamb. ULD	1980	^{1}A ^{2}C
LNGMN NUD	1982	^{1}A ^{2}C (D) ^{4}B ^{8}D

注1．2つ以上数字があるのは，語義を細分化して2つ以上意味をあげていることを示す。例えば，Bは「神から人への愛」「人から神への愛」「人から人への慈悲」，Dは「性欲」「色情」「情交」という具合である。

注2．( )は，言外に含まれていることを示す。例えば（B）は，paternal benevolence，（C）は，Aの定義からCの意味も含まれる場合，（D）はCよりも強く，「性的に引き起こされる激情」と書かれているなど。

注3．CグループのWebster 2nd Coll.Editionはsemantic order，American Heritage Dict.Coll.Editionはanalytical orderによって語義をあげているが，結果的にはloveについて見る限り，frequency principlesによる辞書と異なっていない。

注4．略称した辞書の正式名称

Cent…The Century Dictionary

Univ…The Universal English Dictionary

OED…The Oxford English Dictionary

SOD…The Shorter Oxford English Dictionary

WB 2nd…Webster's New International Dictionary of the English Language. Second Edition.

WB 3rd…Webster's Third New International Dictionary

COD…The Concise Oxford Dictionary of Current English

POD…The Pocket Oxford Dictionary of Current English

Hornby ALD…The Advanced Learner's Dictionary of Current English by Hornby

RHD…Random House Dictionary of English Language

Penguin…The Penguin English Dictionary

WB 2nd Coll.…Webster's New World Dictionary of the American Language. Second College Edition.

WB pock…Webster's New World Dictionary of the American Language. Revised pocket-size edition.

AHD Coll…American Heritage Dictionary. College Edition.

LNGMN MED…Longman Modern English Dictionary

LNGMN DCE…Longman Dictionary of Contemporary English

World B.D.…The World Book Dictionary

Chamber ULD…Chambers Universal Learner's Dictionary

LNGMN NUD…Longman New Universal Dictionary

も，皆，A（一般的）好意，愛情，B（神の，神への）愛，慈悲，C異性間の愛，D性欲，情欲，の順で掲載されている。ここで神の愛が2番目に置かれていることに注目すべきである。

bグループは，辞書の名前にCurrent Englishとうたっていて，OEDの歴史的順序に掲げるという原則から離れ，発刊当時使用されている用法に基づいて記載している。またconcise,pocket dictionaryという名が示すように小型であるため，よく使われる中心的な語義に絞っている。それで，神（へ）の愛は，paternal benevolenceという一般的な広い定義に変えられ，2番目に異

性間の愛,性欲がまとめておかれている。COD 7版,POD 6版に「神の愛」が現われるのは,編集者がJ.B.Sykesに代ったためと思われる。この二つの版では,愛の中の「神の愛」の語義を重視している。

cグループでは,最も頻繁に使われる語義を第一におき,最新の,生きた言葉の状態を反映させようとする方針をとっており,Bの「神（へ）の愛」がずっとあとにおかれるか,姿を消している。それだけ現在この語義で使われることが少ないためであり,反対にC男女の愛,D性欲,情欲の意味で使われることが多いため,C,Dの掲げられる順位が前に繰り上がっている。この中で,同じ頻度による順位を取りつつも,規範的立場を失わない言語学的に穏健な中道を目指した[9]ランダムハウス英語大辞典でさえ,「慈悲」を8番目,「神（へ）の愛」を11番目に置いていることに注目すべきである。

語義の掲載順序の方針に歴史主義と頻度型の違いがあり,また辞書編纂の姿勢に規範主義（aグループ）と記述主義（b,cグループ）の違いがあって,表にあげた辞書を同列に扱うことはできないが,表1から全般的にB「神（へ）の愛」の後退，C「異性間の愛」,D「性欲,情欲」の語義が中心的な位置に移っていることが観察される。同じ頻度型,記述主義のCODとcグループの間に見られる相違からもその傾向が見うけられる。

また,Dの性欲,情欲に加えて「性交」をloveの語義にあげているものにランダムハウス,ウェブスターカレッジ2版,アメリカンヘリティッジ,ロングマン・ユニバーサルがある。

名詞に見られる上記の傾向は,ほぼ同様に動詞についても見受けられる。

聖書における愛の概念を表わす語の変遷

Historical principlesの英語辞書にloveの語義として,「神（へ）の愛」が2番目にあげられているが,これは明らかにキリスト教の聖書の用法からきて

9）小学館ランダムハウス英和大辞典，小学館ランダムハウス英和辞典編集委員会，東京,小学館，1973年，発刊の辞のページ

いる。OEDのその項に掲載された8つの用例を見てみると,975年の引用文（ヨハネ5：42）から始めて,全部聖書の引用ないしキリスト教関係（説教,詩）の文例である。

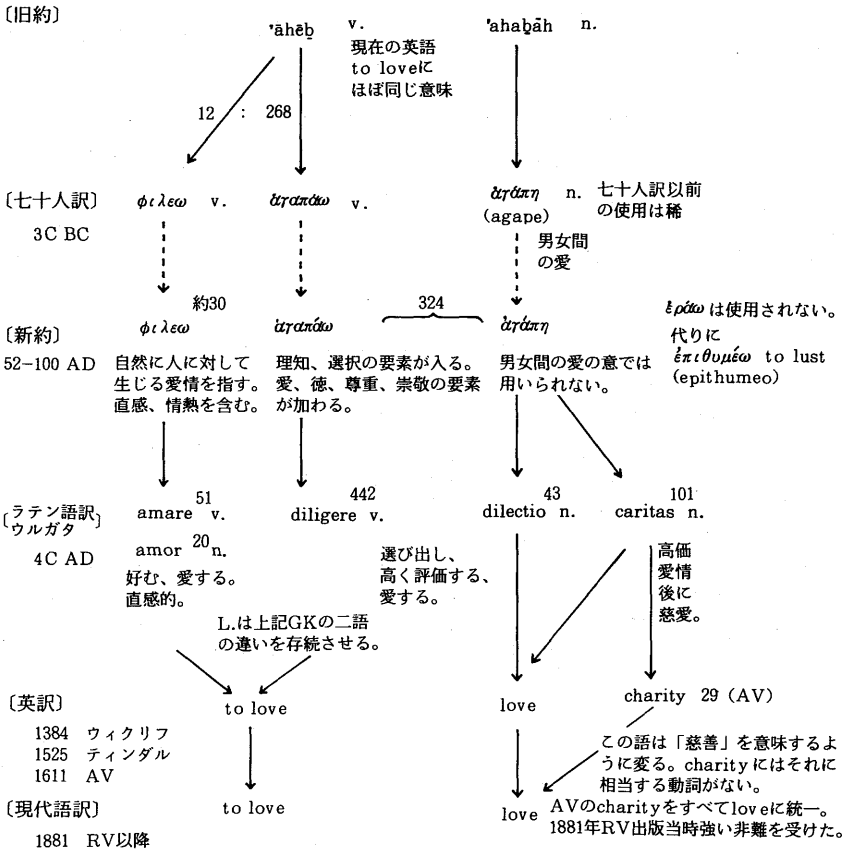
そこで,ずっと時代をさかのぼって,聖書において愛の概念がどのような訳語をへてloveに至っているかを吟味してみることにする。ここで重要な役割を果たすのは,新約聖書のギリシャ語であるが,まず聖書に現われる以前の「愛」を表現するギリシャ語を掲げると表2のようになる。そして,旧約聖書のヘブライ語以下英語に至る変遷を一覧できるようにすると表3のようになる。表4は新約聖書以降の具体例である。

表2　「愛」を表現するギリシャ語

ἀγαπάω (agapaō)	φιλέω (phileō)	ἐράω (eraō)
ホーマー以降古典時代より存在。あるものを他より優遇するという選択的ニュアンスを持つ。 (a) 敬う、認める、価値を認識する、楽しむ。 (b) 所有したいと願う。 (c) 役立ちたいと望む。	肉親、夫婦間の暖かい配慮的愛情を表わす。	元々性的激情と結びつけられた語。 転じて、強い激情を表わす。 プラトンの哲学用語。 「高次元のものを希求する人の至高の願望」

International Critical Commentary, pp. 374. 519より。

表3　聖書における愛を表わす語の変遷



注 1. ⟶は上の語が下の語に翻訳されたことを示す。
2. - - - →は間接的影響を指す。
3. 旧約にもう一語hesed（いつくしみ、恵み）があるが、ἔλεος= mercy, δικαιοσύνη=義と訳され、英語のloveにかかわってこないので省略した。
4. 表中の数字は使用回数を表わす。
旧約はHatch and Redparh, Torommius,
新約は新聖書大辞典、
ウルガタはA Latin Dictionary by Lewis and Shortによる。

表4　変　遷　の　具　体　例

	John 21.15-17	John 13.35	I Cor 13
Greek NT	φιλέω　ἀγαπάω	ἀγάπη	ἀγάπη
Vulgate 382−405	amare　diligere	dilectio	caritas
Wycliffe 1384	loue v.	loue n.	charite
Tyndale 1525	love v.	love n.	love
Authorized Version 1611	love v.	love n.	charity
Modevn Versions RSV 1946 NEB 1961	love v.	love n.	love

以下順次変遷をたどってみると,旧約聖書においては,ahebは現在の英語のloveとほぼ同じ意味で使われている。例えば,創世29：20,列王上11：1では男女の愛,サムエル上18：3では友情,出エジプト20：6,申命4：37では神と人の間の愛を表わしている。

次に新約聖書の前に紀元前3世紀に,旧約聖書がギリシャ語に翻訳されて七十人訳ができた時にどのような語になったかをみてみる。聖書に現われる以前の愛を表わすギリシャ語（表2）の中，ἐράω はあまりに肉感的な語で，φιλέω は主従，親子，夫婦等身内の間の自然な愛を表わすのに用いられていた。そこで3つの語の中,あまり一般的に用いられていなかった ἀγαπάω が,ヘブライ語の ahebを表わすのに採用された[10]。しかし,先に触れたようにヘブライ語の ahebは,今日の英語のloveとほぼ同じ範囲の数々の意味を持つので,その訳語として用いられた ἀγαπάω も同様である。特に名詞形の ἀγάπη は，主として男女間の愛に用いられている（サムエル下13.15,雅歌

の11例[11])。

次に新約聖書は七十人訳に倣って,愛を表わすのに, ἀγαπάω (v.), ἀγάπη (n.) を多用している。ただ,男女間の愛を表わすのに用いていない。性的欲望を表わすのには, ἐράω でなく ἐπιθυμέω (to lust) が使われている。このようにして新約聖書に至って ἀγαπάω の意味は,いわば修正され,新しい概念を持った ἀγάπη が創造されたのである。それでもバートンによれば,新約聖書の ἀγαπάω に表2の3つの要素a,b,cが看取される。例えば友情には「敬意」の意味(マルコ10.21,ヨハネ11.5),イエスに対する神の態度には「承認」の要素(ヨハネ3.35, エペソ1.6),隣人愛や罪人に対するイエスの愛には,「慈悲,役立ちたいという望み」が含まれている(ヨハネ13.34, ローマ13.8,ヨハネ3.16,ガラテヤ2.20),神やキリストに対する人の愛には「敬う,賞賛する」要素が高められて「崇敬」になっている(マタイ22.37, ヨハネ14.15),事物に対する愛には,「敬う」「所有したい」という要素がある(ルカ11.43,ヨハネ12.43)など[12])。

---

10) これについてヘブライ語の 'aheb が「選ばれた民イスラエルに対する神の愛」を表わすので ἀγαπάω が適切であった(馬場嘉市編「新聖書大辞典第三版」キリスト新聞社, 1977年, 11ページ。林達夫, 串田孫一監修「哲学事典」, 平凡社,1971年, 10ページ),「神の愛, 民の神への愛」を表現するのに使われたから ἀγαπάω が φιλέω に優先された(International Critical Commentary p.375)とする説明があるが, 'aheb, ἀγαπάω 共旧約聖書と訳された七十人訳の中でそれ以外の意味でも用いられているので, このような説は受け入れ難い。ただ旧約聖書でそのような意味で使われる箇所が少なくないので, 結局無色無難な ἀγαπάω が採用されたと考えるのが妥当であろう。

11) Burton, E.D. "'ΑΓΑΠΑΩ AND 'ΑΓΑΠΗ" in International Critical Commentary,1921,p.520.名詞形の ἀγάπη については、従来七十人訳の使用が最初で, 他に発見されていない, とされていたが, 今では見つかっている(Arndt, William F. and Gingrich, F. Wilbur, *A Greek – English Lexicon of the New Testament*, Chicago ; The University of Chicago Press,1952,p.5)。バートンはまた ἀγαπάω , ἀγάπη ともキリスト教以前に「役立ちたい」という願望やより高次元の意味を持った言葉として使われていると指摘している(Burton,Ibid.,pp.519,521)。尚,聖書外典の「アリステアスの手紙」(BC2C)に新約に近い用法で ἀγάπη が使われている(日本聖書学研究所編「聖書外典偽典3(旧約偽典I)」教文館, 1975年, 67,297ページ)。

12) Burton, Ibid.,p.520

このように新約聖書の ἀγαπάω も決してcの「役立ちたい望み」という高次の意味でだけ使われているのではなく，φιλέω と代替可能な形で用いられている[13]。しかし，前者が選択的ニュアンスを持ち，後者が自然な直感的愛を表わすという一般的相違は保持され，ἀγαπάω は決して「キスする」という意味では使われず，逆に φιλεῖν は決して人が神または人を愛する，神が人を愛する，という時には使われていない[14]。

このようにして，いわゆる新約聖書の愛，すなわち「価値を認識する」要素を基盤におき，「役立ちたいという望み」を主要な要素とする種類の「愛[15]」，ἀγάπη の概念が生まれるに至ったのである。

次に4世紀にヒエロニムスがラテン語に訳したウルガタ聖書では，ギリシャ語の φιλέω と ἀγαπάω の相違を留めて，amare「好む，愛する」［直感的］とdiligere「選び出して評価する，愛する」に使いわけて訳している。その相違はギリシャ語の相違にそのまま対応している[16]。そして名詞の ἀγάπη は，caritas「高価，愛情」とdilectio「愛情，世話」の二つのラテン語に訳され

13）ヨハネ14.21,16.27；13.23,20. 2等。ἐράω と ἀγαπάω（名詞形ならば ἔρος 対 ἀγάπη）の対比で ἔρος がプラトンにおいて再新され，「所有していないものや見えないが永遠の美に対する思慕」という意味を託されたことについて，トレンチは，それだからこそ新約聖書に採用できなかった，という。人々が，神から賜わって心中にある愛が，人と神に向かって発するのであるから，と説明する（Trench, Richard C., ***Synonyms of the New Testament***, Grand Rapids, Wm. B.Eerdmans Publishing Compny,1880,p.44.傍点は筆者）。またニーグレンも ἀγάπη は ἔρως と違って，対象物の価値には影響されない，と説く（Nygren, Anders, ***Agape and Eros***, London；SPCK,1982,p.77）。しかしこういった説明は，むしろパウロに始まる後の神学的概念の発展であって，当初の ἀγαπάω ἀγάπη が使用されるに至った経緯を客観的に説明するものではないと考える。

14）Burton, Ibid.,p.520.

15）Ibid.,p.521.

16）例えば，ヨハネ21.15—17では同じ場面で二語が使いわけられていて興味深い。イエスがペテロに私を愛するかと二度 ἀγαπᾷς με；とたずね，ペテロが φιλῶ σε と答えている所である。イエスの ἀγαπᾷς に対して，ペテロはより親密な情のこもった φιλῶ で答えている。これはウルガタに引き継がれ，diligereに対しamareを当てている。

ている。その使い分けに首尾一貫した理由はないようである[17]。

次に新約聖書が英語に訳された時,ラテン語のcaritasとある箇所が一部charityと訳されたほか,名詞も動詞もloveという一語に訳されている。ウルガタから訳したウィクリフ訳（1384年）もギリシャ語から訳した欽定訳も同様である。ただ,ティンダル訳（1525年）は全くcharityという語を使っていない[18]。

そして英国改訂訳以降の現代訳英語聖書では,charityが一般的には「慈愛」というより「慈善」を意味するようになっていたため,charityが全く姿を消して,動詞も名詞もloveで統一されていると言うことができる[19]。

以上,聖書における愛にかかわる語義の概観と訳語の流れから,新約聖書で愛の広い範囲を表現するのに,それまでとは異った意味の配分をもって,数語が使い分けられたことがわかる。そして特に高次元の愛に絞って使用され,いわば新しい概念を付与された ἀγαπάω , ἀγάπη が一部ラテン語のcaritasを経て,今日英語のcharityあるいはloveにもその語義を留めているということができる。

今日の英語に及ぼす影響

さて聖書の英国人及び英語に対する一般的な影響について言えば,古くさかのぼればAnglo-Saxonの時代以降,近世では過去3世紀半以上にわたって,シェースクピアと共に他の追随を許さぬ大きな影響を及ぼしてきたことは周知のところである。言語,芸術,文学の面で英語国民の精神的糧となってきたばかりでなく,法律,冠婚葬祭の生活慣行に至るまで,社会全体に浸透している。

---

17) Sandy and Headlam,'The History of the word ἀγάπη' in *International Critical Commentary*, p.375.

18) *Encydopedia Britanica*,, Chicago: Encydopedia Britanica, Inc.,1965 Vol. 3 ,p.583.

19) New English Bibleでは φιλέω の訳に19例中6つto loveでなく,to care, to like, to have a great liking, to be one's friend(s) で表現している。

英文学者ピーター・ミルワードは，英文学の生命の二大源流は，ギリシャ・ローマの古典と聖書にあり，前者は古代と現代の中間の中世に，聖書の影響を受けて今日に及んでいるのであると述べている[20]。そしてシェークスピアもミルトンも宗教改革期の聖書翻訳から多大な影響を受けていると加えている[21]。

このような背景を考えれば，Historical principlesの辞書で「神（へ）の愛」が一般的な定義に続いてloveの語義の2番目におかれているのもうなずける。

ただ今日はどうかと言えば，物質文明が発達し，その影響は大巾に後退しているものと見なければならない。C.S.ルイスは30年以上前に，聖書は19世紀ほど読まれていない，将来博物館に安置される亡霊のような存在になるのではないか，と悲観的見解を述べている[22]。そして，英文学に対する欽定訳聖書の影響は誇張されている，と批判的である[23]。文学者として厳密な彼は，文体上殆んど影響を及ぼしていないと主張しているのであるが，sourceとしての重要性は認めている[24]。そして語彙の上では英語に吸収され，影響を及ぼしていると記している[25]。

このように今日聖書は売れても，教会に行く人口は減っている[26]といった風

20）Milward, Peter, *The Bible as Literature*, Tokyo:Kenkyusha,1983, pp.v,viii.
21）Ibid.,p.vii.
22）Lewis,C.S., *The Literary Impact of the Authorized Version*, Philadelphia: Fortress Press,1963,pp.26,33.
23）Ibid., p.14.
24）Ibid., p.15.
25）Ibid., p.18.
26）1979年10月24日付Japan Times紙。同紙掲載のUPI電は，聖書の売れ行きが新しいブームを迎え，これまで同様今や聖書の印刷は必ず成功する事業であると報じている。例えばNew English Bibleは初年度に2百万部，9年間で1千万部，Good News Bibleは3年で7百万部，Living Bibleは8年で2千3百万部売れている。しかし皮肉なことにこのブームは教会の出席が全体的に急速に減少している時期に起こっている，と報じている。1982年10月3日付ワシントンポスト紙によれば，アメリカのキリスト教会員は，1970年代の10年間に初めて人口増（11.5％）を大巾に下回る会員増（4.1％）となったと報じている。そして連合長老教会が同時期に21％減，米国聖公会が15％減となったこと等数字をあげている。

に,直接的な深い影響は弱まっているが,語彙,慣用句の中に,新聞雑誌の見出しに,演説の引用に,いぜんとしてその根強い影響が現在も観察できる[27)]。

loveについても表1のBの語義「神（へ）の愛,慈悲」が今日の英語に大きな影響を及ぼしている。それは,次に見る人々のloveの解釈で,高次元の愛の概念が重要な位置を占めている点に見ることができよう。

愛についての議論

愛について論じた代表的な神学者,思想家,文学者,精神分析家の議論を概観し,loveの語義の研究の参考とする。

1.アガペー（以下術語として仮名表記をとる）とエロス

ニーグレン

アンデルス・ニーグレンは,新約聖書に説かれる愛の概念をアガペーと呼び,ギリシャ哲学のプラトン的愛,エロスとを対比させ,「アガペーとエロス」という大著を著わした。彼は,アガペーの特徴を,1）自発的で「誘発されないもの」,2）人（対象）の功績にかかわりがない,3）創造的である,4）神との交わりの道を開くものとし,対立物のエロスは,感覚的地上の愛ではなく,洗練された精神的な形のエロスである,とする。

ニーグレンは二つの概念の相違と対照を明確にせんとするあまり,両者を狭く極限にまで規定しすぎ,新約聖書のたとえ話の引用にも無理が出ている[28)]。

後代のルター派神学概念を固定観念とし,それを新約聖書に読み込んだ強引さが感じられ,多くの批判を呼んだが,アガペーとエロスの問題を最初に深く掘り下げた貢献は大きい。

27）バーバラ・片岡,西尾道子「現代英語を読むための辞書,聖書の英語」（サイマル出版会,1982年）は,1980年代に入ってからの新聞雑誌単行本に使われた聖書に起源をもつ表現例を豊富に集めている。

ルージュモン

「トリスタンとイズー物語」を軸に広い領域にわたって愛を吟味したルージュモンの「愛について」（原題は「愛と西欧」）も,結局「西欧文化がキリスト教的な愛であるアガペーと近東的なあるいはヘレニズム的な愛,エロスとの融合と相剋の上に築かれている[29]」ということに結論を帰着させている。そしてプラトンのエロスを「具体的な生からの空しい逃避にすぎない昇華」と呼び,「キリスト教的愛はおよそその反対の道」であって,アガペーの導入によって「愛することは積極的な行動となり,変容の行動となった」と書いている[30]。

ダーシー

主としてニーグレンとルージュモンの著に視点をおいて,両者を鋭く批判しつつ,やはりアガペーとエロスの問題を包括的に扱ったダーシー（英国思想家,カトリック教徒）は,いわば二人の説を修正し,総合して次のように述べる。ニーグレンがエロスとして遠ざける自己愛も正当なものとして承認し,自己完成を望み,真善美を求める自然な自己愛は無視してはならない[31]。エロスとアガペーの名で呼ばれている欲望と愛については,その区別や役割の点で,諸家の間に意見の一致はなく,人の愛が決して単純なものでないことを認めなければならない[32]。二つの両極を説明するには,ニーグレンあるいはルージュモンが定義するエロスとアガペーではなく,アニマ（自我）とアニムス（理性）の区別の方が,この二人や他の学者の言うことを予盾のないものにするだろう[33]という。

28）M.C.ダーシー著,井筒俊彦,三辺文子訳「愛のロゴスとパトス」上智大学出版部,1966年,100ページ。放蕩息子のたとえで,アガペーは人間側の価値にかかわりなく働くという論証に使おうとするが,長男に対するしめくくりの部分は無視し,葡萄畑のたとえでも労働の時間の多少にかかわらず賃金を出すことに例証を求め,皆労力を提供したことを看過している。

29）ドニ・ド・ルージュモン著,鈴木健郎,川村克己訳,「愛について―エロスとアガペー」岩波書店,1959年,iページ,訳者によるはしがき。

30）同上書,88ページ。

31）ダーシー,前掲書,490,491ページ。

32）同上書,206,207ページ。

2.C.S.ルイス

英文学者ルイスは,素人神学者でもあり,在生当時も死後も人気のある著者で,専門の英文学以外の分野で大衆に大きな影響を及ぼしている。彼は晩年,「四つの愛」を著している。様々な角度から次々と描かれる愛についての作品や評論の中にあって,この書は新鮮な解毒剤のような存在で,非常に価値のある稀な書物である,とシドニー・J・ハリスは評している[34)]。

ルイスは愛を幾つかの種類に分類できても,どこかで分断できるようなものではなく,連続したもので,一つの種類から他の種類に移り得るものであると言い,まず愛に次の三つの要素あるいは基本形式があると提唱する。それは「求める愛」Need-love,「与える愛」Gift-love,「鑑賞的愛」Appreciative loveである。「求める愛」は孤独な子供が母親の腕にとび込んでいく時のもの,「与える愛」は家族のために働き,貯える父親の愛,「鑑賞的愛」は美しい女性を見て,その人が自分のために存在するのでなくても,そのような素敵な人を目にすることができたことを喜ぶ態度という。

この三つの要素を一つの次元として,次に愛を四つに分類し,「愛情」affection,「友情」friendship,「恋愛」eros,「聖愛」charityを取り上げ,平面的にではなく,いわば二つの次元から愛の解説を試みているのである。あっさりした筆致の中にも,緻密な展開と考え抜かれたあとがうかがわれ,四つの愛の記述の中に,今日の状況に対するルイスの鋭い批判が含まれている[35)]。

3.精神分析家

以上神学者,文学者,思想家による愛に関する諸説を見てきたが,フロイト以来愛は詩人,作家,哲学者の独占する主題ではなくなって,科学の対象となっ

---

33) 同上書,311ページ。

34) Harris, Sydney J., "Love's Geography" (Rev. of C.S.Lewis's "The Four Loves") Saturday Review. Sept.10, 1960,24.

てきている。そこで3人の精神分析家の考えを概観してみることにする。

メニンガー

「愛と憎しみ」という本を書いたカール・メニンガーは,多くの男女が憎悪や攻撃的性質を媒介とした悪循環に捕われており,これを断ち切るには,全ての悲しみを医すloveという薬によるしかない,と説き起こしている。

人の内にある攻撃的要素は,正常人の場合抑制されるか,自己弁護,昇華,良心の形となって現われる。これはいずれも愛の本性によってもたらされる。正常を欠く人の場合,暴力,窃盗,殺人,挑発的態度等によって他人に向かう。メニンガーは片方に愛の本能,他方に憎悪の本能を想定し（二要素は様々な割合で混在していて,純粋に一方だけがあることはないと断わっている）,前者が後者の力を軽減し,人に社会的に受け入れられる生活を送らせるのに,次の三つの形があるという。一つは破壊的本性の中和ないし昇華であり,二つ目は非性的対象に対する没頭である。例えば,事物やペット動物,人の社会活動では,人の寄り集まり,飲食を共にすること,おしゃべり,勤労,遊びをすること,三つ目は性的対象に愛の営みが行なわれること,である[36]。

40年前にこの本を書いたメニンガーは,これまで夫婦の性生活でさえ抑圧され,何か罪悪視するような傾向があったことに触れ,不要なタブーを捨てるこ

35）エロスと言えば,「愛の神」,「愛の狂乱」,「精神的,哲学的愛」,「性的興奮」といった意味を持つが,ルイスのいうエロスは4番目のものに該当する。ただ,ルイスの分類では「恋愛」と訳すべき概念であって,本能的な衝動はこれと区別してVenusと呼んでいる。（Lewis,C.S., *The Four Loves*, Glasgow: Collins, 1960,p.85）そして,恋愛あるいは愛情を偶像視したこと,恋に落ちることを神聖視した傾向は,19世紀の最大の誤りであったと非難している。（Ibid.,p.13）また,時をへて育ってきたaffectionを伴わないerotic loveほど忌むべきものはない,そのようなことができるのは,天使か獣かいずれかであって,人にできるものではない,と断言する。（Ibid.,p.36）さらに同性間の友情をすぐ同性愛ととるこの頃の風潮は困ったものだと語っている。（Ibid.,p.57）

36）Menninger, Karl, *Love against Hate*, New York: Harcourt,Brace and World, Inc.,1942,pp.263—277.

とを説き,性生活の重要性を強調している。しかし,彼の主張はあくまで総合的に愛が社会の病根を絶つ良薬であるということであり,これを補助するものとして,勤労と遊びをあげている。

メイ

1970年代に米国精神分析学会会長を始め,心理学会長を歴任したロロ・メイは,その著「愛と意志」の中で,今日を大量の刺激があふれているストレスと混乱の時代と呼び,そこに無感動（apathy）が見られるのは当然であって,人々は「愛の価値とか意味を失って,セックスの研究,統計,技術などにすさまじいほどの助けを求めようとしている[37]」と現在を分析する。

そして,愛と意志を,相互に依存し合ったもので,他者を包み影響を及ぼし,同時に自らも相手の影響を受けるよう自己を開放する働きをする対人的体験とし,意志と愛が撤退している状態,すなわち無感動が愛の対立物であると主張する。

エロスは本来,より高い存在に向かう衝動（urge）であったのに,今日人はセックスと直結させ,性的興奮からの解放（緊張の弛緩）というインスタントな満足を表わすようになっている。そして,現代人はセックスを中心にした愛に夢中になって,愛の模造品を追っている。このようにして,愛のない意志すなわち操作（manipulation）と,愛に落ちることのない性の営みが行なわれるようになるのである,と指摘する。エロスがこの傾向をたどる時,これまで文明は必ず没落してきた。メイは,愛と意志,すなわち選択,配慮,忍耐を結びつけなければならない,そしてエロスを飼いならして,高次元のものにもどし,社会を解体から守らなければならない,と警告する。

ロロ・メイの「愛と意志」は,決して手頃な愛のハウトゥものではないのに,アメリカの若い層に広く読まれ,16万部売上げのベストセラーになっている[38]。

37）ロロ・メイ著,小野泰博訳「愛と意志」誠信書房,1972年,4ページ。
38）同上書,479ページ,あとがき。

フロム

1941年に「自由からの逃走」を著わして以来今日まで大きな影響を及ぼしてきたエーリッヒ・フロムは,人道主義的ないし実存主義的角度から精神分析に取り組み,愛について一貫した見解を取っている。

1956年の「愛するということ」（愛の技術,'The Art of Loving'）はフロムの代表作であり,世界的ベストセラーである。この著に彼の考えがよくまとめられている。彼は人々が今日愛に飢えており,恋物語の映画に群がり,愛についての軽薄な歌を次から次へと聞いているが,何も愛について学ぶ必要はないと考えている,と指摘している。フロムによれば,それは愛を,単に幸運であれば偶然経験できる快い感じ（sensation）であると考え,ひたすら愛されることと,愛される人物になることだけを念頭においているからである。

しかし,実際は,愛は一種の技術（art）であって[39],音楽,絵画,医学などのように,能力を修得すべきものである,と言う。artなら理論と実践の両面がある筈で,フロムの愛に関する理論は次のとおりである。人は社会と自然の力の前に隔絶され,孤独で無力である。この殻を破って,外界とまた他の人とつながらないと,人は正気でおれないであろう。隔絶を克服する方法に,祭礼的合一[40],同調（conformity）,創造的活動,そして対人的融合である愛がある。祭礼的合一はごく暫時のもので,同調は疑似的合一でしかなく,創作的活動は必ずしも対人的なものではなく,十全な答えは,愛にある。フロムによれば,「人類は愛なくして一日といえども存在することができない[41]」

ここでいう愛は,共生的給合という未熟な愛[42]を意味しないで,成熟した愛を言う。言いかえると自己の人格,個性を保持しつつ融合する愛であり,強制

39）メニンガーも愛をartと呼んでいる。Menninger, K.,op. cit.,p.277.

40）原始的な部族の間に見られる祭礼的合一の中に,性的なオルガスムがあるが,このトランス状態は,今日の麻薬やアルコール中毒に共通するものである。愛のない性行為は瞬時を越えて人と人の間にある隔りを埋めることはない。Fromm, Erich *The Art of Loving*, New York: Harper & Row, Publishers, 1956, pp. 9 ,10.

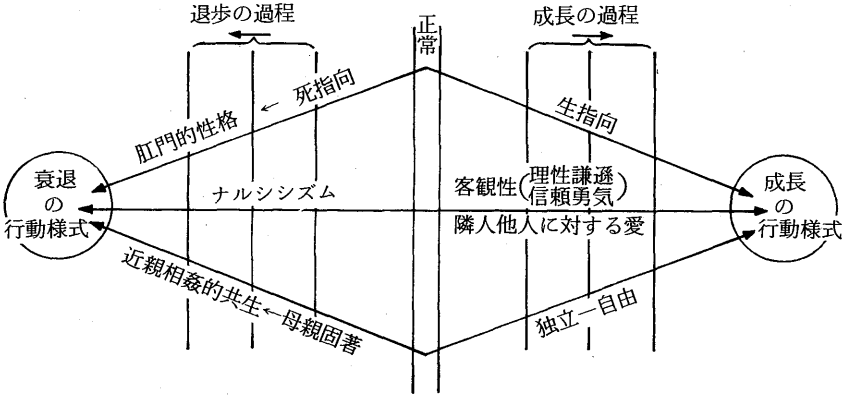
41）Ibid.,p.15.

されないで自由の中に実践される愛,受けるのでなく,誘発されるのでなく,主として与える活動的な愛である。この愛する能力は,自己の人格成長を基いとしており,それに自信がなければできない。すべての形の愛には,世話,責任,尊重,相手の知識を持つこと,という基本的要素があり,いずれも愛の積極的性格を示している[43]。

愛について以上のように説明したフロムは,フロイトが愛をもっぱら性本能の表現あるいは昇華とみたのは誤りである,と批判する。そして,フロイトの理論に影響されて,疑似愛が広まっている。第一次大戦後,一方で性的満足が愛の基礎になると考えられるようになり,他方,夫婦がチームとなって世に対する同盟を構成するという姿が理想化されている。これは二人一組のエゴイズムにすぎず,この二点は愛の崩壊の姿である,と観察する[44]。

そして,フロムは,成熟した愛を実践できる条件はナルシシズムを克服することで,そのためには,客観性,理性,謙遜,信頼,勇気が必要とされる,と説く。以上のフロムの考え方は,1964年の著'The Heart of Man'にわかりやすく図示されている。図5参照。

図5　フロムによる成熟した愛と未成熟な愛の図式



結語

loveはいろいろに定義され,分類されるが,非常に複雑な概念で,どれか一つが他と全く孤立して存在することはなく,いわば連続したものであり,どの愛にも他の愛の要素が混在している。辞書の記載や思想家の観察からもわかるように,現在,高い次元の愛の概念に対して,圧倒的に男女の愛ないしセックスに関連した語義が頻度において優位に立っている。これを中世英語学の寺澤芳雄はloveの風化と呼んでいる。

愛とセックスが「精神分析の文献すべてにわたって主役を演じている[45]」ことは認めなければならない。しかしエッピー・レデラー（筆名アン・ランダース）担当のような大衆のコラムによっても[46],ニーグレン以下フロムに至る思想家の議論からも,loveが人として身につけ実践すべき高次元の愛をも意味していることがわかる。そして,新約聖書以来の愛の区別と意味づけの影響がその底に流れていることが明らかである。

42）受身的な共生的結合は,臨床的用語ではマゾヒズムで,他者から指図され保護されることを望むような関係を指し,典型的には母親と胎児の間柄である。このような間柄では,人は自己の人格を放棄し,他者の道具となっている。能動的な共生的結合はサディズムで,他者の上に君臨し,他者を自己の一部と化す。いずれの共生の場合も他者なしに生きることができない。Ibid.,16,17.愛する人のために完全な自己犠牲を払い,自分の権利を譲ることは,偉大な愛と言われるが,実際はマゾヒズムの傾向がある。また,優位に立つ者が下の者にあらゆる方法を尽くして愛しても,相手が独立して自由になることを拒むなら,それはサディズムである，とフロムは指摘する。Fromm,Erich, *Escape from Freedom*, Holt, Rinehart and Winston, 1941,pp.146.161.

43）Ditto, *The Art of Loving*, 1956,pp.15.17.18.21.22.

44）Ibid.,pp.30.74.

45）ミラー,ハワード・L.,シーゲル,ポール・S.,著,藤原武弘訳「ラブ,愛の心理学」福村出版，1983年．46ページ。

46）アン・ランダースは,最近読者の希望で「愛は火のともった友情である」という書き出しで,一般的な広い意味の愛の定義を再掲載している。（1982年11月5日朝日イブニングニュース紙）。